

「夢に選ばれた人」は誰か？ —ヴィリエ・ド・リラダンとギュスターヴ・ギッシュ—

木 元 豊

0) 序論

ヴィリエ・ド・リラダン (Villiers de l'Isle-Adam, 1838-1889) の晩年の短編小説の一つである「夢に選ばれた人」« L'Élu des rêves » は、あたかも死期の近いことを悟った作者が残した遺言であるかのように読める。というのも、作者自身を彷彿とさせる老人が、死に際して、蓄えていた財産を若い詩人に譲渡して、自らの夢の継続を願うという内容を持っているからである。とはいえ、「夢に選ばれた人」をいきなり作者の遺言としてしまうことはかなり無理がある。1888年11月9日付の『ジル・ブラス』紙 *Gil Blas* に掲載されたこの作品は¹、何よりもまず一般読者に向けられた短編小説であり、しかも「転説法 (métalepse)」という技法の用いられた、多分に幻想的な側面を持った物語だからである²。にもかかわらず、本論文では、「夢に選ばれた人」を、作者の遺言とまではいえないにしろ、ある若い作家に対する作者のメッセージの託された作品として読解してみたいのである。この物語が明らかに含んでいる教訓は、「詩人」すなわち芸術家たろうとする者にのみ向けられており、また、物語の細部から特定の受け手が想定されていることが感じられるからである。ある特定の人物が読めば、この作品のメッセージは自分に向けられているのではないかと感じるような作品というこ

¹ 「夢に選ばれた人」はヴィリエの生前に単行本に収められることがなかった。この点については、以下を参照。Villiers de l'Isle-Adam, *Œuvres complètes*, édition établie par Alan Raitt et Pierre-Georges Castex avec la collaboration de Jean-Marie Bellefroid, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1986, tome II, pp.1605-1607. 以下、本書は O.C. と略す。本論文では、「夢に選ばれた人」の底本として本書を用いる。

² この点に関しては、拙論、「ヴィリエ・ド・リラダンにおける反リアリズムと転説法 (2) 一反リアリズム小説としての『夢に選ばれた人』」、『武蔵大学人文学会雑誌』第47巻第3・4号、武蔵大学人文学会、2016年3月、pp.186-198 (45-33) を参照。

とである。では、この物語の受け手、すなわち「夢に選ばれた人」は誰か。本論文では、その候補者として、晩年のヴィリエと親密な関係にあったギュスターヴ・ギッシュ (Gustave Guiches, 1860-1935) という作家を考えてみたい。物語で問題となっている事柄の多くが彼を指し示しているように思えるのである。

本論文では、まず、「夢に選ばれた人」の物語と作者自身の関係の考察を通じて、この物語が特定の受け手を想定している可能性を明らかにする。次に、ギッシュの回想録などに依拠しながらヴィリエとギッシュの交友関係を確認し、「夢に選ばれた人」の受け手がギッシュである可能性を検討する。最後に、ギュスターヴ・ギッシュをヴィリエ・ド・リラダンの後継者としてすることが可能かどうかを考察したい。

1) 「夢に選ばれた人」の物語と作者との関係

まず、「夢に選ばれた人」の物語の概要を見ておこう。1887年の11月、詩人アレクシ・デュフレーヌは数日前からラ・アルプ通りの学生の下宿となっているとても古い家の6階に住んでいる。その晩は彼の21歳の誕生日で、その祝いに彼は、かつての級友で、ほぼ同年齢の二人、画家のJ・ブレアールと音楽家のウーゼーブ・ネドンシエルを招いて、ボンチを酌み交わしている。二人の友は次第に芸術論を戦わせ始めるが、アレクシは芸術論を無益なものと思っているので、議論には加わらない。ベッドの枕元に締め切りにされた扉があるが、隙間からかすかな光が漏れてきていて、議論の合間にしわがれたうめき声が聴こえてくる。何事なのかを確認に行こうとするブレアールとネドンシエルの行く手を遮って、アレクシは一つの物語を語る。すなわち、扉の向こうには東洋の失われた王国の年老いた王がいて、ダイヤモンドや黄金の詰まった袋を前に、王杖を握りしめ、物思いに耽ったままで、最期の時を迎えようとしている。だから、彼の最後の夢を邪魔してはならないと。現実を確認しに行けば、彼らが才能を得ることはないだろうというアレクシの警告を無視して、ブレアールとネドンシエルは扉を開ける。その扉は使用人用の裏階段の一番上の踊り場に通じていて、向かい側三段上には屋根裏部屋の戸が半開きになっており、光とうめき声はそこから漏れ

ている。戸を叩いても返事がないので、二人は入ってみる。そこはひどい臭いのするみすばらしい部屋で、火の気のない暖炉の上に今にも消えそうな常夜灯がくすぶっている。明かり取りの天窓の下に、詰め物の藁が抜けた椅子が一脚、テーブルらしき影、小鉢が一つあるだけである。そして、最も奥まった暗がり粗末なベッドがあって、ぼろ着をまとった老人が屑屋の爪竿を握りしめて、死にかけている。この光景におじけづいた二人は、黙って扉を閉じて、戻ってくる。彼らはアレクシの見当違いを嘲るが、彼は取り合わず、夜も更けたので散会となる。ブレアールとネドンシェルが帰ったことを確認した上で、アレクシは彼らの不見識をひとり非難した後、ポンチを一杯携えて、隣の老人を見舞う。アレクシが老人に声をかけると、瀕死の老人は起き上がって、ポンチを辞退した後、語り始める。アレクシの声で、さっき王様について語っていた人だと分かった。自分も夢に生きた男である。アレクシの物語は自分の最後の夢となった。ところで、毎夜街をさまよっていれば、夢をほとんど実現するだけのものを見つけることができるのだ。こう述べると、老人は彼の手の中で王杖のように輝く爪竿で、彼の粗末なベッドの布を引き裂く。すると、そこから札束、宝石、金の巻物がいくつも現れる。老人は朝家に戻ると、この宝物を触りながら夢を見たものだと述べる。そして、アレクシを彼の遺産相続人を選ぶ。ただし、彼の二人の友とは決別するように忠告する。老人によれば、遺産は50万フランほどある。自分が死んだらこれを引き継いで、自分の夢を続けるようにとアレクシに言い残すと、老人は息を引き取る。今日、アレクシ・デュフレーヌは、最も確実な金融取引によって、老人の遺産を五倍にして、インドに赴き、ネパールの『千一夜物語』の所領の中心に位置する宮殿に住んでいる。二人の友のことは忘れて、王様の暮らしをしている。一方、J・ブレアールとウーゼーブ・ネドンシェルは相変わらずパリにいて、未来の作家たちが集う酒場に毎晩現れては、物事があるがままに見るようにと説いている。

以上からわかるように、この物語の主題は真の芸術家の同定にある。三人の若い芸術家の内、アレクシ・デュフレーヌのみが真の芸術家であり、それゆえにこそ老人の遺産を相続することができるのである。アレクシと他の二人との芸術家

としての違いは、以下のアレクシの言葉から明らかである。

人生をそれに合致させる術を心得ているあらゆる芸術家にとって、唯一、現実である《想像界》を侮って、彼ら [=ブレアールとネドンシェル] は、そこにあるものを見ることができると信じて、自らの感覚に判断を任せることを選んだのだ³！

アレクシが「想像界」のみを現実と捉える芸術家、すなわち夢想家ないし幻視者であるのに対し、小説の締めくくりとなっている「物事を常に〈あるがままに〉見なければならぬ⁴」という彼らの言葉からもわかるように、ブレアールとネドンシェルはリアリストである。しかも、物語の初めから終わりまで、彼らは三人とも変わることなくそうあり続けるのである。したがって、アレクシが若い芸術家のグループを離れて、老人の後継者となるにしても、これはアレクシの成長の物語ではない。アレクシの芸術家としてのあり方の正当性を保証し、彼を真の芸術家として祝福することが問題なのであり、その役割こそ老人が担っているものなのである。

アレクシ・デュフレヌが真の芸術家である以上、彼の芸術観が作者のそれを反映していても驚くことはないだろう。しかし、たとえアレクシに作者を重ねることが可能だとしても、彼を承認し、祝福する老人の方がより一層当時の作者の状況を反映しているならば、この物語を作者による自己承認の物語と読むことは些か困難になってくるのではないだろうか。なぜなら、作者にとって、理想化されているのは老人ではなくて、むしろ老人によって承認されるアレクシ・デュフレヌの方だからだ。実際、この老人は当時の作者に多くの点で似ているのである。詳しく見てみよう。

³ « Au dédain de cet Imaginaire, qui, seul, est réel pour tout artiste sachant commander à la vie de s'y conformer, ils [= Bréart et Nédonchel] ont préféré s'en remettre à leurs sens en se figurant qu'on peut voir ce qu'il y a ! », *O.C.*, tome II, p.710. 拙訳。強調は作者。

⁴ « qu'il faut toujours voir les choses... TELLES QU'ELLES SONT », *ibid.*, p.711. 拙訳。強調は作者。

まず何よりも、アレクシが21歳になったばかりの若者であるのに対して、老人はまさに死にゆく者である。そして、ヴィリエ自身もまたこの小説の執筆時期に自分の死が遠くないことを感じていた可能性がかなりある。序論で述べたように、「夢に選ばれた人」は1888年11月9日の『ジル・プラス』紙に掲載されたのだが、この発表直後の11月13日に刊行された短編集『新残酷物語』*Nouveaux contes cruels*に収録されるには間に合わなかった⁵。『新残酷物語』には1888年に新聞や雑誌に掲載された8編の短編小説が収録されているが、収録作品中最も新しい「自然愛」*« L'Amour du naturel »*は11月2日の『フィガロ』紙*Le Figaro*に掲載されたものであった⁶。ということは、「夢に選ばれた人」はまさにぎりぎりでも収録に間に合わなかった可能性が高い。このことから、この作品の執筆時期が『ジル・プラス』紙掲載日にかかなり近いことが考えられる。この作品発表後、ヴィリエは健康状態が悪くなり、作品の執筆が滞ってしまう⁷。旧作の推敲や終生抱えた戯曲『アクセル』*Axel*の書き直しを除けば、「夢に選ばれた人」以降にヴィリエが新たに執筆したと考えられるものといえば、両者とも1889年の初頭に執筆されたと考えられている「ピエ先生」*« Maître Pied »*と「最善の愛」*« Le Meilleur Amour »*の短編小説二編しかない。したがって、「夢に選ばれた人」の執筆時期に作者が自分の死が近いことを感じていたとしてもおかしくはないのだ。同年の12月23日消印の手紙でヴィリエはユイスマンス (Joris-Karl Huysmans, 1848-1907) に対して、次のように書き送っている。

君に何を言うことがあろう。——君は本当に良い人だ。これだけだ。

だから、甘えてもいいだろう。良い人というのはそういうことを許してくれるものだから。

もしいつかリュコットの養生鍋を手に入れることができれば、[中略]おそらく回復すると思うのだが。というのも、私が死ぬのは衰弱によってだと

⁵ *O.C.*, t.II, pp.1287-1289 et p.1605 参照。

⁶ *Ibid.*, pp.1309-1310 参照。

⁷ Cf. Alain Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam exorciste du réel*, Corti, 1987, pp.349-354.

思うから⁸。

しかし、この時にはもうかなり回復していたらしい。というのも、12月24日にはマラルメ (Stéphane Mallarmé, 1842-1898) の友人のアンリ・カザリス医師 (Henri Cazalis, 1840-1909) に「少しよくなりました⁹」と知らせているからだ。日付はないがおそらくそれより前に同医師に宛てた手紙では、「二回目の胸膜炎を発症したように思います。もう駄目です¹⁰」と書いている。ヴィリエは「夢に選ばれた人」の執筆後そう遠くない時期に生死の境をさまよったかもしれないのだ。

ヴィリエは、「夢に選ばれた人」の老人と同様に、非常に貧しい暮らしをしていた。それでも、「夢に選ばれた人」の物語が展開する1887年や、この物語が執筆、出版された1888年は、『ジル・プラス』紙のように定期的に彼の作品を掲載してくれる新聞もあり、収入の比較的安定した時期だった。とはいえ、内縁の妻とその連れ子、若い息子のヴィクトール (通称トール) を稿料で養っていかねばならず、決して豊かな暮らしができていたわけではない。そのことは上に引用したユイスマンス宛ての手紙で、リュコットの養生鍋を無心していることからも見取れるだろう。家賃が払えず、家を追い出されることもあった。

「夢に選ばれた人」において、老人の貧しさはとりわけその住居の描写に表されているが、プレイヤッド版全集の解説によれば、「彼のラ・アルブ通りの6階の住居はヴィリエ自身が当時住んでいたピガル通りの5階の住居にとってもよく似ている¹¹」という。ここでもまた、ヴィリエは老人に自らの現実を映しているということだ。とはいえ、正確には、この物語の展開する1887年11月にはヴィリエはブランシュ通り76番地に住んでいたはずであり、物語の出版された1888年11月にはフォンテーヌ通り45番地の5階にいたはずである¹²。ピガル通り49

⁸ Villiers de l'Isle-Adam, *Correspondance générale*, Édition recueillie, classée et présentée par Joseph Bollery, Mercure de France, 1962, tome II, p.252. 拙訳。本書は以下、C.G. と略す。

⁹ *Ibid.*, p.254. 拙訳。

¹⁰ *Ibid.*, p.253. 拙訳。

¹¹ O.C., t.II, p.1607. 拙訳。

番地には1887年の初め頃から1887年7月半ば頃までいたようなのだが、家賃を滞納して追い出され、ブランシュ通り76番地に引っ越したのだ¹³。プレイヤッド版全集の編者の誤解は、ギュスターヴ・ギッシュの回想録の記述の誤りに起因している可能性がある¹⁴。ただ、ヴィリエの住居が「夢に選ばれた人」の老人のものと同様たり寄つたりの詫び住いだっただことは間違いない。マラルメの愛人であったメリー・ローラン (Méry Laurent, 1849-1900) に宛てた1889年1月12日付の手紙で、ヴィリエは病気の見舞いに来たいというメリーに次のような断りを認めている。

¹² ある時期にヴィリエがどこに住んでいたかは、残された書簡に記載された住所からある程度まで割り出せる。1887年7月15日付の手紙でレオン・ブロワがギュスターヴ・ギッシュにヴィリエの新しい住所として、ブランシュ通り76番地を知らせており (Léon Bloy, J.-K. Huysmans, Villiers de l'Isle-Adam, *Lettres, Correspondance à trois*, Réunies et présentées par Daniel Habrekorn, THOT, 1980, pp.88-89)、この住所が最後に確認できるのが、1888年1月5日付のフランソワ・ドブリからヴィリエに宛てた手紙 (C.G., t.II, pp.208-209) であるから、1887年11月にはヴィリエはブランシュ通り76番地に住んでいたはずである。また、ヴィリエがベルギーへの講演旅行から戻ってきた直後の、1888年3月15日付のヴィリエからギュスターヴ・ド・マラルメに宛てた手紙でフォンテヌ通り45番地の住所が初めて確認でき (*ibid.*, p.232)、その後、1889年4月にヴィリエがパリ郊外のノジャン＝シュル＝マルヌに引っ越すまで同じ住所に住んでいたことがわかっている (cf. Alain Raitt, *op.cit.*, pp.345-354) ため、1888年11月にはフォンテヌ通り45番地に住んでいたはずである。

¹³ ヴィリエがピガル通り49番地に住んでいたことが書簡から確認できるのは、1887年2月1日消印のユイスマンスからヴィリエに宛てた葉書の住所 (C.G., t.II, pp.160-161) から同年6月2日付のヴィリエからカチュール・マンデスに宛てた手紙 (*ibid.*, pp.174-175) に記載のものまでである。1887年7月11日付のユイスマンスからアリエ・プリンスに宛てた手紙 (Bloy, Huysmans, Villiers, *Lettres, op.cit.*, p.88) で、ヴィリエが家賃滞納のため引っ越さねばならぬことを知らせており、先の注で言及した7月15日付のブロワからギッシュへの手紙で、ヴィリエがブランシュ通り76番地に引っ越したことを知らせているから、ブロワの手紙の内容から引っ越しは1887年7月11日から13日までの期間になされたと考えられる。

¹⁴ ヴィリエの健康状態やそのすぐ後に来るノジャン＝シュル＝マルヌへの引っ越しへの言及から、1888年末頃かと思われる時期のこととして、ギッシュは次のように書いているのである。「午後、2時頃に、私はヴィリエのところに行って、しばらくいる。彼はもうブランシュ通りに住んでいない。階段を20段上がると、少なくとも10分は息切れる彼が、ピガル通りにある薄暗い家の6階の高みに居することになったのだ。」 (Gustave Guiches, *Le Banquet*, Spes, 1926, p.93, [Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France], 拙訳。) 実際には、ピガル通りからブランシュ通りに引っ越したのであり、引っ越したのも1887年7月であった。ただ、ピガル通りの住居が6階にあったのは、先に言及した1887年2月1日消印のユイスマンスからヴィリエに宛てた葉書の住所 (C.G., t.II, pp.160-161) で確認できる。また、ギッシュによれば、ヴィリエはブランシュ通りではある建物の最上階である4階に住んでいた (Gustave Guiches, *Le Banquet, op.cit.*, p.27)。

さあ、願いますから、美味しいものを持ってこないでください。現代の王子の館であるわがあばら家に、女王陛下として、どうかおいでにならないでください。

枝付き大燭台や花々やすっかり準備の整った洗練された食事でもってあなたをお迎えできないことで、身の振れるような思いがすることでしょう。私は、貧乏が夢でしかないような——この世にいながらにして、すでにその貧乏の夢から醒めてしまっているような、そんな滅多にいない種族の一員なのです。私が目を閉じさえすれば、私の5階の『千一夜物語』を前にして、多くのエリゼ宮が色を失ってしまいます。——しかし、もしあなたがおいでになれば、あなたは現実なのですから、あなたをしかるべくお迎えできる輝かしい宮殿を人生の錯覚の内に投影することができなくて、私の心がどんなに締め付けられることか、お考えください¹⁵！

この手紙で述べられていることは、まさに「夢に選ばれた人」で語られている夢と現実ではないだろうか。ヴィリエはこの手紙の約3ヶ月前にこのフォンテーヌ通り45番地の「あばら家」で、「夢に選ばれた人」を書いていたのだ。彼が自身の境遇を物語の老人に投影していたのは間違いないだろう。

最後に、「夢に選ばれた人」の老人が蓄えた財宝について考えてみよう。老人は屑屋であり、夜な夜な街を巡って、持ち帰って来たもので財をなしたのだ。老人はアレクシにこう説明する。

夢！... とても美しいものだ... だが... 毎夜毎夜首都の通りを巡れば... 夢をほとんど実現できるほどのものを... 時には見つけられることもある！... それを... 見過ごしてしまうのはただ慣れのせいだ！——しかし、節制して、注意深く、掘り出し物をうまく売る力があれば... 金持ちになれる——年を経ればな！... 見なさい¹⁶！

¹⁵ C.G., t.II, p.259.

老人が街で屑を集めて来るように、ヴィリエは街で言葉を持ち帰って来ていた。アラン・レイトはヴィリエの手稿に用いられている紙があらゆるタイプのものであることを記している。

ヴィリエの手稿が途方もないものであるというのは確かである。大きな帳簿用の紙から息子のトールの帳面から借用した紙まで、種々様々な紙が利用されていて、質の異なる、様々な色インクに覆われており、あるものは羊皮紙に天啓を受ける中世の修道僧の細心な注意でもって作成されており、あるものは一刻も待てないほどに急いだ様子で、鉛筆で殴り書きされている。時にはあまりにも擦り切れ、破れているので、レースの切れ端に似ているほどだ。それらはしばしば、丸められてから、次にまた広げられたようで、コーヒー、ビール、ワインの染みがついていて、作成された場所がどこであるのかを明かしている¹⁷。

ヴィリエが街から持ち帰って来る紙屑は、同時に宝だったのである。しかも、忘れてはならないのは、ヴィリエが稿料で生計を立てていたことである。彼の紙屑は詩的財産であると同時に、文字通り経済的な意味でも財産であったのである。だから、ヴィリエにおいては、詩的な夢と一攫千金の夢は矛盾なく両立するのである¹⁸。

したがって、「夢に選ばれた人」の老人の言葉は、常に二重の読解が可能である。上記の引用で「掘り出し物をうまく売る力 (bon placeur de trouvailles)」と訳したところなどは三重の読みさえ可能だろう。すなわち、「掘り出し物をうまく売り払う」という文字通りの意味があると同時に、「発見した言葉を適切な

¹⁶ « Les rêves !... C'est si beau... Mais... en errant par les rues, toutes les nuits, dans une capitale... on trouve parfois... de quoi presque les réaliser !... L'habitude seule fait qu'on dédaigne... cela ! — Pourtant... si l'on est sobre, attentif, bon placeur de trouvailles... on devient... riche — avec les années !... Regardez ! », *O.C.*, t.II, p.710. 拙訳。

¹⁷ Alan Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam exorciste du réel, op.cit.*, p.324. 拙訳。

¹⁸ 詩的活動と経済活動を峻別するマラルメ的な観点に立つとこの点を読み間違えるので、注意しなければならない。

箇所配置する」という詩的な意味が含まれ得るし、また、「作品をうまく流通させる」という作家の処世術に関わる意味もあるだろう。このように、「夢に選ばれた人」の夢見る屑屋の老人は、ヴィリエの意味での詩人に他ならないのであり、まさにヴィリエ本人が投影された人物なのである。

もし老人がヴィリエ自身の象徴なのであれば、老人によって承認されるアレクシ・デュフレヌに、ヴィリエ自身を重ねることはなかなか難しくなるだろう。先に「夢に選ばれた人」をアレクシ・デュフレヌの承認の物語であるとしたが、この物語が同時に老人の返礼の物語であるということに注意しておかねばならない。老人がアレクシを自らの遺産相続人に選ぶのは、彼が「最後の夢」を見させてくれたからである。

あなたは話しておったね。——王様のこと、流謫の男のことを... わしもまた... 夢想家なんじゃ... わしは一生を夢で過ごしてきた! さっき、あなたはわしに良いことをしてくれた... わしに最後の夢をくれたんじゃ¹⁹!

「夢に選ばれた人」において、老人がアレクシを承認するのは、まずアレクシが老人が夢において王であることを認知したからである。こうして、この物語はアレクシと老人との、若い詩人と夢の王との相互承認の物語と見做すことができるのである。もし老人がヴィリエ自身を表しているとするならば、若い詩人がまずヴィリエが何者であるかを認知し、その返礼として若い詩人を承認する、これはそういう物語ではないのか。

2) 「夢に選ばれた人」の受け手は誰か：作者とギユスターヴ・ギッシュとの交友

「夢に選ばれた人」に特定の受け手が想定されているとすれば、その受け手は

¹⁹ « Vous avez parlé — d'un roi, d'un homme d'exil... Moi aussi... je suis un songeur... J'ai passé ma vie en rêves !... Vous m'avez fait du bien, tout à l'heure... Vous m'avez fourni le dernier ! », *O.C.*, t.II, p.710. 拙訳。

この作品に登場する老人にヴィリエ本人の似姿を認めることができるほどには、ヴィリエと親しくなければならぬだろう。そのうえで、その受け手が自らが特別な受け手であると認知可能なだけの情報が物語中に存在していなければならぬだろう。しかし、同時に、そのような同定を妨げるような情報も含まれているはずである。そうでなければ、作者はわざわざ物語化するまでもなからう。直接伝えれば済むことである。物語化するにはそれなりの理由があるはずであるが、それは後に考えたい。いずれにせよ、アレキシが老人の財産に到達するには、まずアレキシが老人を巡る物語を紡ぎ、この物語が老人の真実と合致することが必要だったように、この物語の受け手もまた、物語を読み解くこと、すなわち自ら新たな物語を紡ぎ、それが作者の真意と合致することが必要だと言えるだろう。したがって、この同定は決して絶対的なものにはなり得ないだろう。たとえ想定された受け手本人であっても、決して確信はできなかつただろう。それゆえ、本論文で試みる同定もあくまで可能性の域に留まるものである。とはいえ、第1章で明らかにしたように、夢想家の老人が自分の死に際して後継者の詩人を指名するという物語で、死にゆく老人にヴィリエ自身が自己投影していた可能性が極めて高いのであるから、この特定の受け手が誰かという問題は、ヴィリエが誰を自分の後継者とみなし得たかという問題に直結するのである。可能性に過ぎなくても提示する価値は十分にあらう。

では、ヴィリエはこの物語を通じて若い詩人に何を伝えたかったのであろうか。この観点からすると、「夢に選ばれた人」において、自分の財産をアレキシに譲渡するに際して、老人が、以下に引用した彼の言葉にあるように、一つの条件を提示していることは重要である。

死が近いので、この恐ろしい貧者は息を切らせていた。彼は急いでいるように見えた。

「あんたはそれにふさわしい人だから、わしの相続人にしよう。ただ、——あんたの二人の友達にはもう会わぬことじゃ。あいつらは時間の無駄というのじゃ。——では... さようなら!... そこに50万近くある... あんたが

わしの目を閉じたら、それを取ってくれ、わが息子よ！... そして、わしの夢を続けてくれ！... わしはな、——わしは... 目を醒ます²⁰。」

もう二人の友達と会わないようにということが、老人がアレクシに課す唯一の条件であり、また死に際してどうしても伝えなくてはならないほど重要なことなのである。とすれば、ヴィリエが若い詩人に最も伝えたかったことはこれではないのか。

アレクシの二人の友人、J・ブレアールとウーゼーブ・ネドンシエルの特徴は、リアリストであるということと、理論家であるということにある。この物語では、前者もさることながら、とりわけ後者が批判の対象となっている。老人が彼らのことを「時間の無駄」と呼ぶのも彼らが理論家だからである。物語の結末部でも、彼らは「高貴な『美学者』²¹」と形容され、「若い未来の作家たちに、『物事を常に〈あるがままに〉見なければならぬ』ということ、理論でもって示そうと懸命になっている²²」と、リアリストであるだけでなく、理論家であることが強調されているのである。興味深いのは、老人の忠告を受ける以前から、アレクシが理論家を軽蔑していることである。彼の誕生日会で、ブレアールとネドンシエルは美学的な議論を始めるが、次の引用にあるように、アレクシは黙っているのである。

今や、抽象的な芸術論、「美学」が議論されていた。アレクシは彼らが言うことを、ぼんやりと聞いていた。言わせておいたのだ。というのも、理論癖を身に付けた芸術家は、少なくとも看過して構わない批評をもごもご呟くの

²⁰ « La mort oppressait l'effrayant pauvre : il parut se hâter. / « Puisque vous en êtes digne, je vous fais mon héritier. Seulement, — ne voyez plus vos deux amis ; ils s'appellent du temps perdu. — Maintenant... au revoir !... Il y a là près d'un demi-million... Quand vous m'aurez fermé les yeux, prenez cela, mon fils !... et continuez mes rêves !... moi, — je... m'éveille. » », *ibid.*, p.711. 拙訳。

²¹ « nobles « esthéticiens » », *ibid.* 拙訳。強調は作者。

²² « [...] nos jeunes écrivains futurs, auxquels ils s'efforcent, à coup de théories, de démontrer « qu'il faut toujours voir les choses... TELLES QU'ELLES SONT ». », *ibid.* 拙訳。強調は作者。

が関の山で、避けられて老いる運命を自ら選び取っているということを確信していたからだ²³。

アレキシがこれほどすでにわかっているのであれば、老人が再度忠告する意味もないのではなかろうか。これほど何度も繰り返し述べられているということは、これこそヴィリエが受け手に伝えたかったことなのだろう。

したがって、物語に想定されている特定の受け手は、ヴィリエがかなり親しくしている若手作家で、芸術論を戦わせるリアリストたちと親しいとまずは考えられるだろう。しかも、プレールとネドンシエルがアレキシと「ほぼ同い年²⁴」であり、「かつてのクラスの仲間²⁵」であることから考えると、ヴィリエの若い友人は、同い年ぐらいの理論好きのリアリストと親しいのみならず、かつては仲間だったらしいと推測できる。そして、物語が冒頭で1887年11月に位置付けられていることを考慮すると、対象をかなり絞り込むことが可能になる。

1887年ヴィリエはリアリストとみなされ得る複数の若い芸術家と交際があった。なかでもとりわけ親しくしていたのがギュスターヴ・ギッシュ (Gustave Guiches, 1860-1935) である。ギッシュの回想録によれば、彼がヴィリエと知り合ったのは、1887年2月だったようだ。その時、彼は処女長編小説『セレスト・プリュドマ』*Céleste Prudhomat*²⁶を刊行したばかりだった。その後彼らはかなり短い期間で親しくなっていたようだ。一方、ギッシュは同年8月18日付の『フィガロ』紙に掲載されたあの有名な「五人の宣言」*« Manifeste des Cinq »*の署名者の一人となる。これは、周知のように、ゾラの弟子と目されていた若手作家たちが、ゾラに送った公開絶縁状である。注意したいのが、この宣言の署名者は皆ほぼ同い年であることだ。ギッシュ以外の署名者の生没年は以下の通りで

²³ « L'on agitait, maintenant, d'abstraites questions d'art, d'« esthétique » ; Alexis les écoutait, distraitement, laissant dire, étant persuadé que les artistes qui prennent le pli des théories ne se destinent qu'à vieillir évités, en balbutiant, pour tout bien, des critiques au moins négligeables. », *ibid.*, p.707. 拙訳。

²⁴ « à peu près de son âge », *ibid.* 拙訳。

²⁵ « ex-compagnons de classes », *ibid.* 拙訳。

²⁶ Gustave Guiches, *Mœurs de province — Céleste Prudhomat*, Librairie moderne, 1887, (Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France).

ある。ポール・ボンヌタン (Paul Bonnetain)、1858-99；J=H・ロニー (兄) (J.-H. Rosny aîné)、1859-1940；リュシヤン・デカーヴ (Lucien Descaves)、1861-1949；ポール・マルグリット (Paul Marguerite)、1860-1918。ギッシュにとっては、同じ流派に属していた、ほぼ同い年の仲間たちということになる。また、署名者の一人のリュシヤン・デカーヴはユイスマンスと親しく、ユイスマンスを通じてだと思われるが、ヴィリエとも 1887 年頃から交流があった。興味深いのは、プレイヤッド版全集で公表された「夢に選ばれた人」の草稿から、ヴィリエがアレクシの友人の画家の名を、J・ブレアールにするか、リュシヤン・デュボワ (Lucien Dubois) にするかで迷ったことがわかることである²⁷。果たして J・ブレアールのモデルとしてリュシヤン・デカーヴがヴィリエの念頭にあったのだろうか。この点は後にもう少し詳しく検討してみたい。最後に、これが最も重要な点であるが、ギッシュはおそらくは 1887 年の後半にヴィリエの家で、ヴィリエの手稿を譲り受けているのである²⁸。これだけ条件を満たしてくると、ギュスターヴ・ギッシュを「夢に選ばれた人」の受け手として検討してみる価値が十分あるだろう。以下、主としてギッシュの回想録を手がかりに、ギッシュとヴィリエとの関係を振り返ってみよう。

ギッシュは『人生の饗宴で』 (*Au Banquet de la Vie*, 1925) と『饗宴』 (*Le Banquet*, 1926) の 2 冊の回想録でヴィリエとの交友に関して述べている。大まかには時間軸に沿って語られているようだが、年月はあまり明確にされておらず、出来事の順番も前後が入れ替わることがあるようである。そうした時間的なずれは、ギッシュの記憶違いに起因するものも多いようだが、大きくテーマごとに語っていく構成方法にも関係しているようだ。そこで、そういうずれを他の資料を参考に修正しつつ、ギッシュとヴィリエの交友関係を再構成してみたい。

ギュスターヴ・ギッシュは 1860 年 6 月 18 日にロット県のアルバに生まれた。文学を志し、1881 年 10 月末、21 歳の時に義兄の紹介でガス会社に職を得て、パリに出てくる。『人生の饗宴で』はこのパリに出てくる直前の状況から始まり、

²⁷ O.C., t.II, pp.1605-1606 参照。

²⁸ Gustave Guiches, *Le Banquet, op.cit.*, pp.43-52 参照。

1887年8月の「五人の宣言」で終わる構成を取っている²⁹。ヴィリエとの関係でまず重要な点は、パリに出てきてまもなく、シャルル・ビュエ (Charles Buet, 1846-1897) のサロンでジュール・バルベイ・ドールヴィイ (Jules Barbey d'Aureville, 1808-1889) と、彼の秘書をしていたレオン・ブロワ (Léon Bloy, 1846-1917) と知り合っていることだ。彼らとの交際はシャルル・ビュエがパリを去るまで続いたようだ。正確なことはわからないが、1882年頃から1884年頃までと思われる。ブロワとはヴィリエと交際するようになってから、再び付き合い始めることになる。また、やはり1884年頃かと考えられるが、後のアカデミー会員アンリ・ラヴダン (Henri Lavedan, 1859-1940) と知り合っている。ラヴダンには、最初の長編小説『セレスト・プリュドマ』を原稿の時点から見てもらっており、共作もいくつかある。ヴィリエと初めて会食した時も、ラヴダンと一緒にだったようだ。ギッシュは処女長編のアイデアを練り始めた頃に会社を解雇され、文学で生きていくことになる。『セレスト・プリュドマ』を書き上げたギッシュは、ラヴダンから紹介された出版社で編集者ギュスターヴ・ド・マレルブ (Gustave de Malherbe) を知る。マレルブに認められ、カンタン社 (Maison Quantin) の傘下に新たにでき、マレルブが編集長を務める、現代書房 (Librairie moderne) の第1冊目として『セレスト・プリュドマ』を刊行することが決定する。ギッシュは11月上旬に出来上がった本を見たことを記しており³⁰、同書の刊行年は1887年となっているので、他の出来事との関係から考えると、ギッシュが完成した本を見たのは1886年11月上旬だとわかる。そして、『セレスト・プリュドマ』の刊行を経て、2月のある日曜日にマレルブの家でヴィリエと会食することになるのである³¹。したがって、ギッシュがヴィリエと知り合ったのは1887年2月ということになる。

マレルブは当時、現代書房からヴィリエの戯曲『アクセル』*Axel* を出版する予定で、頻繁に連絡を取っていた³²。ギッシュはヴィリエと知り合いになりたく

²⁹ Gustave Guiches, *Au Banquet de la Vie*, Spes, 1925 (Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France) 参照。

³⁰ *Ibid.*, p.182.

³¹ *Ibid.*, p.190.

て、マレルブに会わせてくれるように頼んでいたのだ。ギッシュはヴィリエと知り合いになりたかった理由を次のように述べている。

なぜなら、『残酷物語』と『未来のイヴ』を読んでから、ある人たちにとってはヴィリエ・ド・リラダンは哀れな男だが、別の人たちにとっては、偉大な、とても偉大な紳士であることがわかっていたからである³³。

「夢に選ばれた人」のアレクシが老人の内に流謫の王を認めたように、ギッシュはヴィリエの偉大さを見抜いていたわけである。マレルブはギッシュの熱意を知っていて、自分の家で昼食会を開き、ギッシュとヴィリエを引き合わせることにしたのだ。そこにはアンリ・ラヴダンとモーリス・ド・フルリ医師も招かれ、ヴィリエは息子のトトールも連れてきていた。ギッシュはこの昼食会の模様を『人生の饗宴で』の一節分を当てて詳述しているが³⁴、ここでは詳しくは触れない。ただ、ギッシュが「このマルタ騎士団員 [=ヴィリエ] は [中略] ブランシュ通りにある、薄暗く小さな住居に住んでいる³⁵」としていることは注意しておこう。先に見たように、ヴィリエは頻繁に引っ越しをしているが、1887年2月にはまだブランシュ通りには住んでおらず、ピガル通りに住んでいたはずなのだ。ギッシュは『饗宴』の中で、ヴィリエがブランシュ通りからピガル通りに引っ越したと記しているが、実際はその逆で、家賃が払えなくて1887年の7月中旬にピガル通りからブランシュ通りに引っ越している。ギッシュが『饗宴』の中で問題にしている引っ越しは、その時のヴィリエの健康状態の記述から見て、ブランシュ通りからフォンテーヌ通りへの引っ越しの可能性が高い。こうした記憶の誤りは、おそらくヴィリエがブランシュ通りに住んでいた期間、すなわち1887年7月中旬から1888年の初頭までの期間に、最も頻繁にヴィリエの家を訪

³² 結局、『アクセル』がカンタン社から刊行されるのは、ヴィリエの死後の1890年1月である。Cf. O.C., t.II, pp.1448-1458.

³³ Gustave Guiches, *Au Banquet de la Vie*, op.cit., p.182. 拙訳。

³⁴ *Ibid.*, pp.189-196.

³⁵ *Ibid.*, p.190. 拙訳。

れていたために起こったのではないかと推測できる。ギッシュにとって、ヴィリエの記憶はブランシュ通りの家の記憶と強く結びついているようだ。「夢に選ばれた人」の物語の舞台が1887年11月、すなわちヴィリエ自身がブランシュ通りに住んでいた時期になっていることを思い出しておこう。

先にも述べたように、『人生の饗宴で』では1887年8月の「五人の宣言」とその反響までのことが回想されているが、上記の会食後のヴィリエとの交友のことはほとんど述べられていない。しかし、「自然主義者と象徴主義者」と題された最終章において、マラルメから受け取った1887年6月6日付の手紙、ギッシュが自著、まず間違いなく『セレスト・プリュドマ』を贈ったことに対する礼状を引用して、ヴィリエがマラルメの『半獣神の午後』*L'Après-midi d'un Faune* に関して見たという夢の話を紹介している³⁶。エドワール・デュジャルダン (Édouard Dujardin, 1861-1949) が編集長を務める『独立評論』*La Revue indépendante* が1887年に『半獣神の午後』の決定稿を、同年4月から12月まで9分冊で刊行するマラルメ作品集の一冊として出版しているが、同誌1887年4月号の裏表紙にそれが出版されたばかりという広告が出ており、『半獣神の午後』が9分冊の最初のものであったことがわかる³⁷。ギッシュがヴィリエから夢の話聞いたのは、1887年の4月頃だった可能性がある。ちなみに、ヴィリエも作品を発表していた『独立評論』であるが、ギッシュも寄稿しており、1887年4月号に「守護霊」*« Les Ombres gardiennes »*³⁸、1888年1月号に「ソドムの恥じらい」*« La Pudeur de Sodome »*³⁹ という中編小説を発表している。

『人生の饗宴で』に続くギッシュの回想録『饗宴』は、冒頭が「1887年10月のこの日⁴⁰」という語句で始められており、あたかもその後記述される出来事がすべてこの時以降のものであるかのように読めるのだが、他の資料と付き合い

³⁶ *Ibid.*, pp.199-202.

³⁷ 『独立評論』*La Revue indépendante de littérature et d'art* の1887年刊行の各号の内容は、フランス国立図書館運営のインターネットサイト Gallica (gallica.bnf.fr) で確認できる。

³⁸ Gustave Guiches, « Les Ombres gardiennes », *La Revue indépendante de littérature et d'art*, No.6 (tome III), avril 1887, pp.100-120.

³⁹ Gustave Guiches, « La Pudeur de Sodome », *ibid.*, No.15 (tome VI), janvier 1888, pp.30-57.

⁴⁰ Gustave Guiches, *Le Banquet, op.cit.*, p.7. 拙訳。

せて検討してみると、どうもそうではないようだ。特に本論文にとって重要な、ヴィリエ、プロワ、ユイスマンスの三者との関係を語っている回想録の初めの3分の1ほどは、テーマで構成されている側面が強い。したがって、ギッシュの語り口を考慮に入れつつ、語られている出来事をできるだけ時間軸に沿って整理したい。

まず『饗宴』の冒頭を振り返ってみよう。「部屋の一瞥／一脚の離れたテーブル」と題された最初の節は、『饗宴』全体の序の役割を果たしており、以下のよう

1887年10月のこの日、私は、ゾラの自然主義に反対する宣言に署名した仲間たちの後に続いて、「人生の饗宴」が設えてある部屋に入った⁴¹。

先を読めば、『人生の饗宴』が設えてある部屋が文壇を意味していることはすぐに理解できる。つまり、1887年8月の「五人の宣言」で良くも悪くも有名になった作者はとうとう文壇の著名人の仲間入りができたということなのである。ただ、なぜその入場が10月のある日になっているのかはよくわからないが、その日がギッシュの人生にとって特別な日だったことは間違いない。この入ったばかりの「部屋」で、ギッシュは行き場に迷うのであるが、最終的に「一脚の離れたテーブル」に向かっていくというところで、この節は終わる。この「一脚の離れたテーブル」とは、ヴィリエ、プロワ、ユイスマンスの集うテーブルのことであり、当時セーブル通りのユイスマンス宅で日曜日に行われていた三人の会食のことを指している。そして、『饗宴』は、このテーブルの「最初の会食者」としてヴィリエを、「二番目の会食者」としてプロワを、「三番目の会食者」としてユイスマンスを挙げ、それぞれとの思い出を語った後に、この三人の日曜日の会食に初めて招かれた日の思い出を語るという大まかな構成になっている。特にヴィリエとの思い出に関して多くのページが割かれているのだが、どうもそこで語られていることが時間軸に沿っていないようなのだ。したがって、注意深く展開を

⁴¹ *Ibid.* 拙訳。

追っていく必要がある。

『饗宴』の第1章は、ギッシュとアンリ・ラヴダンが共作でカフェ・コンセルを描き、フォラン (Jean-Louis Forain, 1852-1931) に挿絵を依頼する話から始まる⁴²。そして、フォランと会い、出来上がった挿絵の見本を見るためにギッシュはサン＝ブノワ通りにあるカンタン社に向向くのだが、彼はそこで原稿を現代書房に持ってきていたヴィリエに会う。『カフェ・コンセル』の出版が決まり、ギッシュは現代書房の原稿審査委員会 (la comité de lecture) のただ一人のメンバーだったので、『人生の不安』*Peur de la vie* という作品を推薦してから、ヴィリエといっしょにモンパルナス駅の近くに食事に行く。そして、ギッシュは酔っ払ってしまったヴィリエをブランシュ通りの家まで送っていき、ヴィリエの仕事場にも通される。その後、酔いが覚めたヴィリエからその日中に『ジル・ブラス』紙まで届けなければならないという物語の話を聞く。ヴィリエはその物語を大変うまく語った後、もう書く気がなくなったようなことをいう。ヴィリエはその嫌な仕事を避けたくて、ギッシュを夕食まで引き留めようとするが、ギッシュはヴィリエの仕事を妨げてはならないと辞去する。

このエピソードは、ギッシュがヴィリエの家をおそらく初めて訪問した時の様子を伝えるものでとても重要であるが、いつのことなのか曖昧である。ブランシュ通りにヴィリエが住んだのは、1887年7月中旬以降のことのはずである。『カフェ・コンセル』という作品は実際にカンタン社から出版されているが、出版年が記載されていない⁴³。『人生の不安』という作品は、シャルル・リシャール (Charles Richard) という作家の作品のようで、1887年に現代書房から出版されているが、この本の見返しに挿入されている現代書房の出版物の宣伝にギッシュの長編小説第2作目の『敵』*L'Ennemi* が出ていない⁴⁴。『敵』は法定納本を1887年7月にしているから⁴⁵、『人生の不安』に宣伝が出ていないのは少し奇

⁴² この段落でまとめたエピソードは以下で語られている。Ibid., pp.11-30.

⁴³ *Le Café-concert*, texte par Gustave Guiches et Henri Lavedan, illustration de J.-L. Forain, gravée sur bois par Florian, Quantin, [S.D.], (Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France).

⁴⁴ Charles Richard, *Peur de la Vie*, Librairie moderne, 1887, (Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France).

妙である。最もわからないのは、ヴィリエが当日中に『ジル・プラス』紙に持っていかななくてはならないと述べている物語に関することである。内容から「奇妙な完勝」« Un singulier chelem ! » という作品が問題なのは間違いないのだが、この作品は1886年11月14日付の『ジル・プラス』紙に掲載されているのだ⁴⁶。もしヴィリエがギッシュに真実を語ったのであれば、このエピソードは1886年11月14日以前のことになり、ギッシュがヴィリエと知り合ったのもそれ以前ということになる。しかし、ヴィリエに夕食を供する余裕はあまりなかったはずで、芝居を打って急ぎの仕事があるように見せかけて、相手が帰るように仕向けつつ、礼を失しないように引き止めてみせた可能性もある。

ギッシュが次に語っているエピソードの時期は、もう少し明確になる⁴⁷。ギッシュは『時代』紙 *Le Temps* の編集長アドリヤン・エブラール (Adrien Hébrard) に気に入られて、『時代』紙に『セレスト・プリュドマ』に続く第2作目の長編小説『敵』を連載することになる。エブラールはギッシュがゲラの校正に訪れると、ヴィリエの話をするようにせがんだというのである。そして、何日か後、見知らぬ男といっしょにレストランから出てくるエブラールに会い、その見知らぬ男がギッシュを紹介されて、ギッシュの小説なら喜んで受け入れると告げたという。一方、エブラールはギッシュがこれからヴィリエのところへ行くのだと当ててみせる。ギッシュは、見知らぬ男が誰かを気後れして尋ねられなかったことを悔いながら⁴⁸、実際ブランシュ通りの方に向かった。このようなエピソードである。ギッシュが『時代』紙に『敵』を連載していたのは、調べてみると、1886年12月18日から1887年2月8日までである⁴⁹。ということは、ギッシュはこの時期にすでにヴィリエの家を訪れるほど親しくなっていたということであるから、マレルブを介してヴィリエと知り合ったのは、1887年2月より前だった可

⁴⁵ 『敵』の扉に記載されている。以下を参照。Gustave Guiches, *Mœurs de province — L'Ennemi*, Librairie moderne, 1887, (Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France).

⁴⁶ Cf. *O.C.*, t.II, pp.1209-1213. 筆者自身も1886年11月14日付の『ジル・プラス』紙を、Gallicaにて確認した。

⁴⁷ このエピソードについては、以下を参照。Gustave Guiches, *Le Banquet*, *op.cit.*, pp.30-34.

⁴⁸ なお、この見知らぬ男は『フィガロ』紙の編集長フランシス・マニヤール (Francis Magnard) であったことが後にわかる。*Ibid.*, p.128 参照。

⁴⁹ Gallicaにて、『時代』紙 *Le Temps* を確認した。

能性がある。

これら二つのエピソードから確実に言えることは、ギッシュが少なくとも1887年の初頭にはヴィリエの家をしばしば訪れるほど親しくなっていたということ、もしそうならば、ギッシュが最初に訪問したのはブランシュ通りの家ではなかったということである。

『饗宴』においてギッシュは、上記のエピソードに続けて、以下の順に話を進めている⁵⁰。近所の子どもにヴィリエの息子がたたかれたことにまつわるエピソード。ヴィリエの略歴と人物の紹介。ヴィリエから手稿を譲り受けたことと、譲り受けた手稿の列記。ベルギーへの講演旅行。ヴィリエの人気が高まっていることと、彼の家で出会った人々のこと、また彼の読書のこと。そして、締めくくりに、ヴィリエとギッシュ自身の関係について、1887年12月18日付のヴィリエからの手紙を引用して語った後に、ヴィリエを介してプロワと再会することになったことを記している。次に「二番目の会食者」であるプロワとの再会、そしてプロワを介してユイスマンスが会いたがっていると知ったこと。続けて、「三番目の会食者」であるユイスマンスとの出会い、ユイスマンス宅での最初の会食のことという順である。

ヴィリエがベルギーへ講演旅行をするのは1888年のことで、2月13日に出発し、3月10日にパリに戻ってくる⁵¹。上記の出来事の中ではおそらくこれが最も後のことではなかろうか。ユイスマンス宅での日曜日の会食にギッシュが「四番目の会食者」として加わったのはそれより随分前のことで、1887年7月半ばよりは前だったはずである。1887年7月14日の晩をヴィリエは、パリ郊外のモンルージュに住むリュシヤン・デカーヴの父の家で過ごしているのだが、この晩はヴィリエの独壇場で、ユイスマンスがこの時のことをよく思い出していたことを、デカーヴが自身の回想録『ある熊の思い出』*Souvenirs d'un ours*の中で語っている⁵²。デカーヴによれば、そこにはプロワ、ユイスマンスに加えて、ギッシュもいたというのだが、ギッシュはどうもそこに居合わせなかったようなの

⁵⁰ Gustave Guiches, *Le Banquet*, *op. cit.*, pp.35-87 参照。

⁵¹ Cf. Alan Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam exorciste du réel*, *op. cit.*, pp.337-340.

⁵² Lucien Descaves, *Souvenirs d'un ours*, Les Éditions de Paris, 1946, pp.70-71.

だ。翌15日付のプロワからギッシュに宛てた手紙で、ギッシュの家まで迎えに行ったのにいなかったため、素晴らしい夕べを逃してしまったことをわざわざ告げているからだ⁵³。この手紙はさらに興味深く、ヴィリエを迎えに行ったのが彼の新しい住所、ブランシュ通り76番地であったことを伝えているのである。もしギッシュとプロワの交際がヴィリエを介して再開したのなら、この手紙以前のはずであるし、状況からして、この時点でまだユイスマンス宅での会食に呼ばれていなかったとは考えにくい。ギッシュによれば、日曜日の会食に新たな会食者が加わることは少なく、リュシヤン・デカーヴの他には、時たまプロワの友人のジョルジュ・ランドリー (Georges Landry)、それからアンリ・ジラル (Henri Girard) というユイスマンスに心酔している俳優が加わる程度だったからである⁵⁴。7月14日の晩は日曜日の会食のメンバーが、デカーヴの父の家に集まるような形だったのだと思われる。

このように、ギッシュの回想録から出来事の正確な時期を割り出すことは至難の技である。ただ、確実に言えることは、1887年を通じて、ギッシュがヴィリエにとって最も近い若手作家の一人であり、ギッシュが度々彼に会い、また彼の家を訪問していたということである。ヴィリエがギッシュのことをかなり気に入っていたことは明らかである。

とりわけ本論文にとって重要なのは、ギッシュがヴィリエからかなりの数の手稿を受け取っていることである。ギッシュはその時のことを次のように述べている。

ヴィリエ・ド・リラダンに、彼に関するモノグラフを正確なものにしたい旨を告げ、資料を要求したところ、彼は引き出しを開けて、ものすごい紙屑の山を取り出して、テーブルの上にはばまくと、この暖炉の火を危うく免れたような、破れ、ぎざぎざになり、手巻き紙のように丸められ、染みが付き、黄色くなった紙の山を指差して、笑いながら、彼は私に向かって、次の

⁵³ Bloy, Huysmans, Villiers, *Lettres, op.cit.*, pp.88-89.

⁵⁴ Gustave Guiches, *Le Banquet, op.cit.*, p.87 参照。

ような挑戦の言葉を放った。

「聖なる主人を剽窃することなく、君にあえてこう申し上げよう。取りたまえ、そして書きたまえ。これがわが命（人生）⁵⁵。」

まず、確認しておきたいのは、ヴィリエは「剽窃することなく」と言っているが、彼の言葉がイエス＝キリストの最後の晩餐における使徒への言葉のパロディであることである。冗談めかしているが、ここには案外ヴィリエの真意があったのかもしれない。つまり、手稿を渡すということは、まさに自分の命を渡すことだということである。ギッシュは果たしてその重みがわかっていたのだろうか。ヴィリエは彼にただ手稿を与えたのではない。彼がヴィリエに関するモノグラフを書くと言っているから与えたのである。ギッシュは約束を果たしたのであるか。筆者が知る限りでは、ヴィリエの生前にギッシュが認めたモノグラフは、1889年1月15日付の『挿絵入り雑誌』*Revue illustrée* に発表した「ヴィリエ・ド・リラダン伯爵」*« Le Comte de Villiers de l'Isle-Adam »* のみである。プレイヤッド版全集の編者は、このモノグラフから二つの警句を抜き出して全集に収録しているが、例外的に手稿によらないものを再録する理由に、このモノグラフは明らかにヴィリエの口述によって書かれていると見てとれることを挙げている⁵⁶。しかし、少なくとも、この二つの警句に関しては、ギッシュが受け取った手稿から選んだ可能性もあるのではなかろうか。

ギッシュが『饗宴』に採録しているヴィリエの手稿はかなり様々なものを含んでいるが、トリビュラ・ボノメに関するものを多く含んでいることに特徴がある。この登場人物を主人公に据えた小説集『トリビュラ・ボノメ』が刊行されるのは1887年5月である⁵⁷。ギッシュが手稿を受け取ったのが1887年11月であってもおかしくはない。ヴィリエは『トリビュラ・ボノメ』の序文で、もしこの人物が人気を博すようなら、彼に関する挿話と彼の警句を集めたものを出版する用

⁵⁵ *Ibid.*, pp.43-44. 拙訳。

⁵⁶ O.C., t.II, p.1008 et p.1765.

⁵⁷ Cf. *ibid.*, pp.1142-1146.

意があるとしているが⁵⁸、結局これは出版されることがなかった。ギッシュが入手した断片には、この元になるようなものが多く含まれているのである。「夢に選ばれた人」においてアレクシが堅実な金融取引によって老人の遺産を五倍にするように、もしかするとヴィリエはギッシュが彼の手稿をうまく整理して出版するか、モノグラフにまとめるかして、彼の夢を継続することを願ったのかもしれない。このように考えるとやはり、「夢に選ばれた人」はギッシュに対するメッセージを十分含み得たと言えるだろう。

3) ギュスターヴ・ギッシュはヴィリエ・ド・リラダンの後継者か？

ヴィリエはギッシュの一体どういう点に気に入ったのだろうか。『饗宴』にはユイスマンスやプロワのギッシュの作品に対する感想は出ているが、ヴィリエのものは一切ない。ギッシュによれば、ヴィリエはあまり読書をしなかったらしい。

彼は新聞を読まなかった。政治は彼を苛立たせた。[中略] 彼は批評を忌み嫌っていた。彼に賞賛を惜しまないものでさえも。彼がページを繰るごく数の少ない本に関しても、彼は奇妙に短くふざけた感想しか述べないか、不意に熱狂して、自己流に本を作り変えてしまう⁵⁹。

とすれば、ヴィリエがギッシュの作品を読まなかった可能性も、読んだとしても何も言わなかった可能性もある。

ギッシュ自身もヴィリエが自分のことをどう思っているのかわからなかったようだし、また、自身自分がなぜヴィリエのところに足繁く通うのかもわからなかったようだ。

そうだ！私はこんな男のそばに何をしに来ているのだろうか。私より20歳

⁵⁸ *Ibid.*, p.131 参照。

⁵⁹ Gustave Guiches, *Le Banquet*, *op.cit.*, p.56. 拙訳。

も年上で、私の考えも、趣味も、生きるための情熱も共有しておらず、羽ばたくというよりもむしろもがいている天才にしか見えず、意識的にしろ、無意識にしろ、あれほど完全に個人的な芸術をまねることなど、私にとっては、愚かな行為か、弱点にしかならないような、そんな男のそばに！

そうだ、私は私の友人には決してならないだろうこの男のそばで何をするのだろう。というのも、しょっちゅう会っても彼の中には馴染みができるだけで、決して友情は生まれえないからだ。警戒心のせいで、彼は、最も親しい仲間のうちにも、罪の痕跡を残さずに殺してしまうボルジア的な毒を彼に盛りかねない敵を常に見てしまうだろう！彼もどうして私がこんなにしばしば彼のところに来るのか自問しているに違いない！？…

邪魔をしているのだろうか⁶⁰？

最後の質問に対しては、ギッシュは否定の答えを出している。というのも、ギッシュがヴィリエに会いに行かないと、ヴィリエの方から待っていたのという手紙が来るからというのだ。おそらく、お互いにどうしてかよくわからず惹かれあっていたのだろう。

ブロワはギッシュに、ヴィリエは彼の冗談好きなところが気に入っていると言っただけ⁶¹。ヴィリエ自身が冗談好きなのはよく知られている。一方、ギッシュはユイスマンスに初めて会った際に、その冷笑的な態度に強い反発を覚えたことを明かしている⁶²。ギッシュとヴィリエとは気質的にも似たところがあったのかもしれない。

こういう関係だったからこそ、ヴィリエは物語を通してしか何かを伝えられなかったのかもしれない。物語ならば受け手を束縛しないし、また送り手も束縛されないからである。最後は受け手である読者の自由と責任に委ねられるのだ。

「夢に選ばれた人」では、老人がアレクシにリアリストで理論家であるかつて

⁶⁰ *Ibid.*, pp.56-57. 拙訳。

⁶¹ *Ibid.*, p.64 参照。

⁶² *Ibid.*, pp.65-72 参照。

の友人たちと決別するようという忠告を残していた。先の引用の中でギッシュ自身も述べているように、ヴィリエは根本的に批評嫌いであったが、それは批評を無駄なこと、すなわち非生産的行為と考えているからである。老人がアレキシの友人たちを「時間の無駄」と呼んでいたのは、そういう意味である。この点をギッシュとの関係で考えてみれば、やはり「五人の宣言」が問題になってくるのではなからうか。ギッシュは彼の回想録において、ヴィリエと親密に交際し始めたのが、あたかも「五人の宣言」後であるかのような書き方をしているが、本論文で明らかにしたように、ヴィリエとは「五人の宣言」以前にかなり親しくなっていたはずなのである。だから、ヴィリエが「五人の宣言」のことを知らなかったとは考えにくい。ユイスマンスは「デカーヴとギッシュがこの一件で二次的役割しか果たしていないことを知り、胸をなで下ろした⁶³」という。

この点で、ヴィリエが「夢に選ばれた人」のアレキシの友人の画家の名前をJ・ブレアールとリュシヤン・デュボワで迷って、最終的に前者を選んだのは興味深い。リュシヤン・デュボワの名前を考えた時に、ヴィリエの念頭に最初からデカーヴがあったのかどうかは定かではない。しかし、ユイスマンスの友人であり、自分も付き合いのあるデカーヴを思わせる名前を避けるために、J・ブレアールに決めたということは十分あり得るだろう。もしヴィリエがギッシュに伝えたかったことがあるとしたら、誰かと決別せよといった表面的なことではなく、「宣言」といった無駄なことにかかずらうなということだろうからである。

では、まず間違いなく「夢に選ばれた人」を読んだはずの当のギッシュは、どのように感じたのだろうか。自らをヴィリエの後継者の位置に据えたのだろうか。この点で興味深いのが、1891年にジャーナリストのジュール・ユレ (Jules Huret) が行なった「文学の進展」に関する調査における、ギュスターヴ・ギッシュの紹介と彼の回答である。ギッシュは「五人の宣言」の他の署名者と同様に「ネオ＝リアリスト」(Néo-Réaliste) と分類されているが、ユレはギッシュの紹介を次のように結んでいる。

⁶³ ロバート・バルティック『ユイスマンス伝』、岡谷公二訳、学習研究社、1996年、p.172.

彼の新しい作品、とりわけ『予期せぬこと』は、彼が心理分析に専念していること、彼が芸術において、人気の点では劣るが、より洗練された師匠たち、とりわけヴィリエ・ド・リラダンの後に続いていることを示している⁶⁴。

たしかに、1887年刊行の処女作『セレスト・プリュドマ』や第2作目の『敵』は、ともに「地方風俗」という副題が付されており、作者ギッシュのよく知る故郷、カオール周辺を舞台に、『セレスト・プリュドマ』では農民出の女小学校教師の不幸を、『敵』ではブドウネアブラムシのもたらした荒廃を、冷徹かつ客観的に描き出した三人称小説で、自然主義小説とみなし得るものである。それに対して、引用でユレが問題にしている『予期せぬこと』*L'Imprévu*は一人称小説で、自分ではすべてを見通し、計算高く振舞っているつもり語り手を据えつつ、物語は常に語り手の予想を裏切る方向に進んでいくという実験的な小説である⁶⁵。不明の語り手を据えている点では、ヴィリエの「クレール・ルノワール」*« Claire Lenoir »*と共通している。ヴィリエの影響がなかったとは言えないかもしれない。また、『予期せぬこと』の語り手は、作家として成功することを夢見て、地方からパリに出てきた若者で、地方の行政的慣習に関する小説を書いているところだという⁶⁶。作者が自分自身をパロディ化している側面もあるわけで、こうしたユーモアにもヴィリエとの繋がりが確認できるかもしれない。さらに芸術家を志望しつつ、見えているつもりで何も見えていないという語り手の愚かさは、「夢に選ばれた人」におけるブレアールやネドンシエルの愚かさと同様であり、その点で『予期せぬこと』は「夢に選ばれた人」に対するギッシュ流の返答のようにも読めなくはない。いずれにせよ、ユレははっきりとギッシュにヴィリエの後継者を見ているわけで、上記のような読解もあながち的外れではないだろう。

さらに興味深いのは、ユレの調査に対するギッシュの回答である。まず、多く

⁶⁴ Jules Hulet, *Enquête sur l'évolution littéraire*, THOT, 1984, p.219. 拙訳。

⁶⁵ Gustave Guiches, *L'Imprévu*, Flammarion, [1890].

⁶⁶ *Ibid.*, pp.32-33.

の作家がインタビューに答える形で回答しているのに対して、ギッシュは書簡での回答というユレが介入できない方法を選んでいることである。また、つまるところ流派という観念自体に意味がないという回答で、ユレの調査自体の意味を無効にするような内容なのである。ギッシュは次のように述べる。

なんとこの滅多にない喜びで、あらゆる流派の観念の消滅は迎えられることでしょう！作者を分類しなくてはならないという心配をすることなく、作品それ自体を鑑賞できるのはなんと快いことでしょう⁶⁷！

流派にとらわれず、作品自体と接しようとするこの態度の中にこそ、ヴィリエの影響を見るべきかもしれない。「夢に選ばれた人」で老人がアレクシに決別するように忠告しているのも、エコール（流派・学校）的なものに他ならないからである。

ところで、「夢に選ばれた人」においてアレクシが老人の遺産を受け継いだように、ギッシュがヴィリエの手稿を受け継いだとすれば、夢を継続するとはそこから作品を紡ぐことではないか。ヴィリエは1889年8月18日に亡くなるが、没後間もない8月31日付の『フィガロ』紙の文芸付録に、ギッシュは「未発表の思い出—親密なヴィリエ・ド・リラダン」« Souvenirs inédits — Villiers de l'Isle-Adam intime »を發表している。さらに、1890年5月1日付の『新批評』*La Nouvelle Revue*に、「ヴィリエ・ド・リラダン」« Villiers de l'Isle-Adam »というモノグラフを掲載している⁶⁸。そして、何よりも『饗宴』において、ヴィリエとの交流を生き生きと伝え、彼から受け取った手稿を公開することを通じて、ヴィリエを蘇らせているのである。その意味でも、ギッシュはヴィリエの遺産相続人であり、後継者であると言えるだろう。

⁶⁷ Jules Hulet, *op.cit.*, p.221. 拙訳。

⁶⁸ Gallica (gallica.bnf.fr) では『新批評』*La Nouvelle Revue*の1890年3月号から6月号までが欠落しており、筆者はこのモノログに関しては未確認である。

4) 結論

本論文では、ヴィリエ・ド・リラダンの晩年の作品である「夢に選ばれた人」が老人から若い詩人への遺産相続の物語であり、この老人の内に当時の作者自身の姿が投影されていることから、この物語がヴィリエの周辺にいた若手作家の誰かを受け手として書かれたのではないかという仮説を立て、その受け手がギュスターヴ・ギッシュである可能性を検討してきた。最終的に、もし「夢に選ばれた人」が特定の受け手を想定しているのだとすれば、その受け手がギュスターヴ・ギッシュである可能性はかなり高いと言えるだろう。

ギュスターヴ・ギッシュは現在はまだほとんど読まれることのない作家である。「五人の宣言」の作家たちの中では、最も自然主義から遠い作家であったので、自然主義文学の研究の中での扱いも小さい。例えば、シャルル・ブーシャ『フランス自然主義の歴史』は「五人の宣言」の作家を一人一人取り上げているが、ギッシュの扱いが一番小さい⁶⁹。アラン・パジェスは『自然主義』において、「五人の宣言」の作家たちの作品の内、今日でも読む価値のあるものをいくつか挙げていますが、ギッシュのものは入っていない⁷⁰。日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』ではギッシュのみ個別の項目がない⁷¹。こうした過小評価は、ギッシュ自身も『饗宴』の中で述べているように、彼が世紀の変わり目の頃には売れる文学を目指したということも関係しているだろう。『エミール・ゾラ辞典』は、「彼 [=ギッシュ] は安易なものの方に流れ、金もうけのための作品を量産した⁷²」と手厳しい。

しかし、彼が売れる文学を目指したことにも、ギッシュがヴィリエ・ド・リラダンのような作家と親しかったことが関係していないとも限らないのだ。まず第一に、彼はヴィリエを見て、「呪われた詩人」の舐めなければならない辛酸は身

⁶⁹ Charles Bouchat, *Histoire du naturalisme français*, Corrêa, 1949, tome II, pp.275-307.

⁷⁰ Alain Pagès, *Le Naturalisme*, Presses Universitaires de France, « Que sais-je », 1989, pp.59-60.

⁷¹ 日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』、白水社、1974年。

⁷² Colette Becker, Gina Gourdin-Servenièrre, Véronique Lavielle, *Dictionnaire d'Émile Zola. Sa vie, son œuvre, son époque suivi du dictionnaire des « Rougon-Macquart »*, Laffont, « Bouquins », 1993, p.174, l'article « GUICHES Gustave », 拙訳。

に染みていたはずだ。彼自身も会社を解雇されてから筆一本で生活しており、両親も決して裕福ではなかった。売れなければ生きていけなかったのだ。また、「五人の宣言」の作家たちの中で、早逝したポール・ボンヌタンを除けば、彼だけがアカデミー・ゴンクール协会会员（会食者）になっていないように、文壇で確固たる地位を築けていない。このことにも彼が「離れたテーブル」の会食者であったことが関係しているかもしれない。

一方、ヴィリエ・ド・リラダン研究者もまた、これまでほとんどギユスターヴ・ギッシュに目を向けて来なかった。もちろん、ギッシュはヴィリエに関する重要な情報提供者であり、その点ではギッシュは常に考慮されてきた。しかし、ヴィリエの影響が取り沙汰されるのはもっぱら象徴主義の流れを組む作家たちであって、そこからギッシュは漏れていた。彼の作品をヴィリエと関係付けて読解する試みを筆者は知らない。しかし、本論文で明らかにしたように、ヴィリエ自身、ギッシュの内に自身の後継者を見ていた可能性は十分にある。少なくとも1890年頃のギッシュの作品はヴィリエの影響を感じさせるものであり、またジュール・ユレのようなジャーナリストもそのように見ている。したがって、今後改めて、ギッシュの作品をヴィリエと関係付けて考察していくことで、これまで見過ごされてきた文学史の一側面が明らかになるだろう。